



国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)の関係者と共に、難民キャンプの視察をする日比野さん

紛争を乗り越えて、 平和と安定をサポートしたい

紛争の予防や再発防止に取り組む JICA 社会基盤・平和構築部。日比野さんは、2014年8月に設置された平和構築・復興支援室で、紛争を経験した国や地域の持続的な平和と安定の定着に向けて奮闘中だ。

アジアで会った少女の一言が人生を変えた

大学時代、開発経済学を学んだことをきっかけに、開発途上国に関心を持つようになりました。休みになるとアジアや南米を旅していたのですが、そこで目の当たりにしたのは日本とは異なる途上国の惨状。その衝撃が、その後の人生を考える上での原動力となりました。

今でも覚えているのは、カンボジアで会った8歳くらいの女の子。近くに寄ってきて何か買ってくれとせがまれた時、「I, so happy to you (あなたにとっては安い)」と言われたのです。日本では何不自由なく生活し、海外旅行もできる。でも目の前にいるこの子は、学校にも行けず、自分で稼いで生きていかなければならない。そう思うと返す言葉がありませんでした。生まれる環境によって、教育の機会や人生の選択肢が限られてしまう。そんな現実には生きる彼女たちのためにできることはないかと、考えるようになりました。

劣悪な生活環境で暮らす パレスチナ難民キャンプの人々

そして大学卒業後、就職先として選んだのが JICA でした。最初に配属されたのは、東京の本部にある中東・欧州部。その後、念願かなってシリア事務所へ赴任する

ことになりました。

担当したのが、シリア北部にあるパレスチナ難民キャンプの環境を改善する事業。1948年の第一次中東戦争で戦火を逃れた約3000人の難民が暮らしていました。その後、徐々に人口が増え、私の赴任当時は2万人以上が生活していました。簡素な掘っ立て小屋が並び、水も電気も十分に行き届かない生活環境は劣悪でした。

そこで日本は国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)と連携し、学校やコミュニティセンターの建設、教育支援などを実施することに。私は UNRWA の依頼を受けて現地のニーズをくみ取り、より効果的な支援につなげられるよう、日本の外務省への橋渡し役を担っていました。初めて携わる大きなプロジェクト、しかも難民支援というセンシティブな分野に戸惑いもありましたが、現場の意見に粘り強く耳を傾けて、日本の協力で反映できるよう努めました。

ここで学んだのは、国際機関をはじめ多くの組織が関わる平和構築支援の現場では、これまで以上に柔軟な発想が求められるということ。現場の意見を尊重し、前例のないことにも挑戦できる JICA の組織風土にも後押しされ、シリアでは、さまざまな立場の人と協議を重ねながら最善のプロジェクトを組み立てることができ、とても刺激的な時間でした。シリアの難民支



JICA 社会基盤・平和構築部
平和構築・復興支援室

日比野 崇

HIBINO Takashi

大学卒業後、2003年に JICA に就職。中東・欧州部、シリア事務所、総務部を経て 2013年10月から現職。



レバノンのパレスチナ難民キャンプで、生活環境について調査

分野横断的な視点が求められる 平和構築の仕事

援の現場経験を軸に、これからも難民と開発というテーマに取り組みでいきたいと思いを新たにしました。

現在は社会基盤・平和構築部で、紛争の影響を受けた国や地域の支援に携わっています。その一つが、40年にわたって紛争が続いていたフィリピンのミンダナオ。2012年に政府と反政府グループとの間で和平に関する枠組み合意が締結され、「パンスモ口自治政府」の創設に向けて、JICA は専門家派遣や人材育成のサポートを続けています(8ページに関連記事)。

紛争後の国や地域での支援を適切に行うためには、法律や組織体制、行政官の育成などに関する知識が必要です。より深く理解するための勉強は大変ですが、今後の糧になると信じ、日々新たな課題に取り組んでいます。